

G・カミンスキー博士（オーストリア・中国研究院院長）を囲む座談会

華国鋒治下の中国

— はっきりものを言いはじめた幹部 —

（出席者）

東京外国語大学学長 坂本 忠
東京外国語大学助教授 中嶋 嶺雄
毎日新聞論説委員 江頭 数馬
毎日新聞外信部員 宇佐美 滋
ドイツ語通訳 勝 茂夫

（二月十九日 アジア調査会会議室で）

本誌 きょうはウィーンから中国を訪問してこられたオーストリア中国研究院院長ゲルト・カミンスキー博士を迎えて、お話をうかがうことに致しました。ご承知のように毛沢東、周恩来

の亡くなったあと、中国の政治情勢は非常に動いており、華国鋒体制の将来はじめ、いろいろな問題に大きな関心もたれていきます。
今回カミンスキーさんは中国で、中国側の要人ないしは当局者といろいろお話された由なので、新体制下の中国の印象などからお話をうかがって、そのあと、ご出席のみなさんから質疑なり、コメントをしていただいて、この座談会を進めていきたいと思います。

変らぬ外交路線

カミンスキー 最初に、この会合を成立させるために奔走して下さった中嶋先生に厚くお礼を申し上げます。

まず今回の旅行の印象についてお話しして、そのあとで自身の専門分野、つまり中国の国際法及び中国の法体系一般に関してですが、その研究分野における進展について触れたいと思います。

また今回、中国に滞在中、メモを沢山とりましたので、細部に関する質問がごありの場合は、データを調べればすぐわかります。

今回私がコンダクターとして率いたグループは、毎年一度中国を訪問する当研究院のデレゲーションですが、今回の団長となったのはオーストリアの法務大臣で、オーストリアの二大政党の院内総務も加わっておりしました。

オーストリアの場合、社会党と人民党（編者注、日本の自民党に相当する）という二大政党は得票率の九五％を占めているので、今回の団体によって、オーストリア国民の（編者注、得票率に投票率をかけると）九〇％が代表されたことになります。

さて、今回、中国の私たちに對する接し方には、以前より緊張が緩和された状態を示唆するものが幾つかありました。

出発を前にしてウィーンの中国大使館員あるいは北京当局者からも、オーストリア大使館に対して、何度も今回の団体はオーストリア人民の九五％を代表している、という言葉がありました。人民の大部分を対立する二大政党が代

表するというのは、純粹マルクス主義的観点から、なかなかあり得ないものです。そういうことが、中国の緩和された路線の印であると私たちは受取っております。

私たちは、北京に到着したのは十二月二十九日でした。到着後間もなく、中国側当局から対外政策関係について会談を申込みましたが、中国側は、今回の会談について大きな評価をしているようでした。

会談では、まず中国側が基調演説を行い、その中身は通訳をまじえて二時間に及ぶものでしたが、その構成、あるいは力点の置き方から、演説は国連演説にも匹敵するものであると感じました。演説の中で当局者は、従来の外交路



カミンスキー博士

線に対して、今後同じ姿勢の堅持というのを特に強調し、外国でたびたび聞かれる中国の外交路線が変化するのではないかと懸念、あるいは疑問に対しては、それをきっぱりと否定しました。

またいままでの毛沢東路線継承については、対ソ政策、対米関係においても、あるいは日本との関係においてもあてはまるものです。そして中国側は中ソ関係が根本的に改善するという可能性を全く打消しました。

演説の中では、はっきりとした形で、ソ連がオフエンシブ・パワーであるという表現が使われ、それに対し日本や中国、あるいはアメリカをも含む他国は守勢に回っている。デフエンシブな状況に迫られているという言及がありました。さらに、このようにデフエンシブな状況に迫られている国ぐにの連帯の可能性が暗示、示唆されました。

現在の政府からは、「四人組」と呼ばれているグループには、彼らがソ連との同盟国関係に入ろうとした罪状が突きつけられました。そのような同盟関係に入るることによって、中国を従属関係に巻込もうとした罪状があげられた。

また北京当局は、第二世界の言及においては、ある程度のあいまいさを残しており、喬冠華の国連演説よりは非常に柔軟化したもので、第二世界が第三世界を搾取しているという暗示は非常に弱い形でしか行けなかった。さらに、二超大国に対する他の国ぐにの連帯が強調された。ただ講

いれば、ソ連にとって非常に有利な方向に働き、世界情勢に大きな変化をもたらしたであろうという感じがした。つまり、もしそのようなことが実現していたならば、ソ連の絶対的な優位というのがヨーロッパにおいて確立されたであらうし、その結果、世界における絶対的な優位というのが成立したであらう、ということです。

また北京当局者ないし譚震林氏とも、中国は二度解放されたと言及しました。一度目は一九四九年の段階であり、今回の四人組から解放されたのが二度目であるという言及がなされました。

また、故周恩来首相を、毛沢東思想の実践の模範としてうたい上げました。毛沢東が掲げた原則を、周恩来自身が生きた見本として示したとして評価しました。このような周恩来に対する評価は、私たちが見学できた、あるいは旅行できた中国のいたるところでやはり確認された。

また特筆すべきことは、私たちが接した高級幹部は、全員がプロ華国鋒であり、彼らの四人組に対する嫌悪に関し

ては、ざっくりばらんに表現していました。北京における工業関係の工場では、私たちを案内してくれた中国人は、その工場の至るところで見られた四人組を対象とした漫画について触れました。その中でも、特に四人とも首つりのシーンを風刺したような壁新聞では、特にこれを写真に撮って見たらどうですかというふうに言われ

演後のディスカッションの中で、中国側は、外交路線の大きな枠組は新たに再確認されたが、喬冠華の演説に比べたら、今回は多少ニュアンスの差が出てきていることを認めた。

またASEAN諸国の中立化の問題は、原則としては肯定されたが、これについてどういう形式の中立をとるか、ディスカッションの際には具体的な表現を避けていました。

また私の「共産主義的な永久中立化というものが想像できるか」という質問に対し、当局者の返事は返ってきませんでした。そして私の得た感じでは、中国はASEAN地域においては、どちらかといえば中立化政策を目指しており、実際に法的拘束力、つまり制度としての中立、法的秩序としての中立というものを余り求めていないように思えました。

活発な四人組批判

この演説でうたわれた大原則は、全国人民代表大会常務委員会副委員長の譚震林氏の演説においてもそのまま完全に裏付けられました。

譚震林氏も演説の中で、やはり四人組に対しては、彼らが意図的にソ連との同盟関係を目指していたという罪状を突きあげたが、そのニュアンスは、もしそれが具体化して

た。つまり本当は彼らをこういう運命にあわせるべきであるという、ざっくりばらんな表現でした。そして私たちが接した外交部の幹部も、四人組に対する批判では、口をふさぐことはなかった。

また中国を旅行する過程で、この新しい路線のマニフェステーションを、当地の人たちとの会談を通して、あるいは至るところで私たちのために開かれた演芸とか講演会とか、あるいは壁新聞を読むことを通して、新しい変化した中国のマニフェステーションを確認することができた。

私たちは北京のあとは上海、南寧、桂林、杭州を旅行した。そして至るところで省レベルの幹部から一番下の学校、あるいは工場レベルの幹部からまで広く話を聞くことができた。

そしてわれわれは、周恩来に代わって、鄧小平が職務を担当していたときから、私たちの知っている幾つかの原則を再確認することができた。すなわち、それらは革命と生産の両方に立ち向かう「紅」と「専」を同時に遂行すること、及び今世紀末までに四つの近代化を実現すること、それらの原則が確認された。

行届く華イメージづくり

また華国鋒を毛沢東と同列に並べる工作は非常に行届いており、例えば写真にしても、至るところに華国鋒と毛沢

東の写真が同じ大きさで並んで貼ってあり、また演劇に關しても、毛沢東のときと同様に、華国鋒をうたい上げるような新しい歌が無数に出来上っていた。演劇を観賞していた聴衆は、華国鋒をうたい上げるような新しい、見慣れないものに對しては、少し間をおくというかすぐにはついて行けず、少し距離をおいて受取り、熱狂するようなことはなかった。

私自身としては、そのような現象には少しも驚きません。なぜなら、華国鋒は写真やテレビ、演説でたびたび見たが、どうしても華国鋒には、人を引っ張っていくような、カリスマ性のようなものを感じさせない。

聴衆は逆に、特に古い演劇ものに関しては非常に熱狂しており、テーマとしては、遊撃戦争ものとか、あるいは昔から伝わっている「南泥湾」には熱狂しておりました。

また長年出演することが禁じられていた往年の歌手、郭蘭英女史も出演するようになりました。

各工場では、一般的な意見としては、四人組の罪は生産を妨げたことである。なぜなら、四人組は、生産を促進する、あるいは奨励するようなものは、すぐ資本主義者として片付けてしまったからです。

また学校、あるいは大学で公表されたのは、もし四人組のスローガンをそのまま遂行していたならば、結果としては「紅」だけになってしまい、「專」というものが身につ

かなくなってしまう。それは結局毛沢東先生の教えに反することになる。なぜなら、毛沢東は、專を身につけた労働者階級を欲しがっていたからである。

慕われる故周總理

またご承知のように、鄧小平が非常に攻撃された基礎科学の研究、あるいは理論の追及、そういうものはいまや完全にリハビリテーションされている。

同様に私たちが訪れた各都市では、故周恩来總理についての追悼の意というものも広く浸透していました。私たちと接していた外交部や対外交流協會の幹部に關しては、その追悼の意というのは本ものであったと思われます。なぜなら、私たちは一緒に周恩来總理の葬儀の模様をフィルムで見たが、そのとき彼らは涙ぐんでしまった。

同じように、全国各地で周恩来の記念展覽会が開催された。そして周恩来に對しても、以前は毛沢東に對してのみ使用された表現、つまり毛先生がこの工場を見学して下さいましたというのと同じような表現が周恩来に對しても使われ始めています。

例えば、杭州における砂糖工場での例をあげると、そこでは何年何月周總理が来て下さった——という表現が用いられた。

では私の専門分野である法律及び国際法、特に国際法に

關する短かな考察を行い、終わりにしたいと思います。

四人組に對する抗争は、逆に中国における法律問題の要請、法律そのものに對する意識の要請のルネッサンスを可能にしてくれるように向けられた。

現在、新たな本の出版が次々と準備されています。特にそれらの本の中で、法律体系の中での「証拠物」というものに関する章は非常にたつぷりとしてあるが、まさに、いかにある条件の証拠だてをするかというそのものに関しては、四人組の全盛期は全く恣意的に扱われたものです。

また国際法に關しても、国際法にたずさわっている学者、官僚のストックも段々と増えています。

皆様にご注意をお願いしたいのは、一九五七年の段階で非常に激しい批判を受けた翁杰陽博士（北京大学の国際論の教授、一九五七年に更迭された）に關してですが、その教授が再び活躍しております。

翁教授は、北京大学の国際法研究室だけでなく、外交部の国際当局にも協力して仕事をしておりますが、これは中国内部での緩和傾向のひとつの表われではないかと思ひます。

これらの私の考察は、初めに青木先生（本誌）がおっしゃったように、時勢が非常に流動化しており、さらにいままでの一時の停滞そのものがダイナミックに動いているという考察を裏付けるものではないかと私も思っています。

これから私の述べたことに對して、いろいろと質問もありでしょうし、詳しいデータに關しての質問でありますれば、喜んで細かいデータをお知らせしたいと思います。

四人組とソ連

江頭教馬 四人組がソ連との同盟關係に入るように画策したというお話だったが、これまでの人民日報などの公式発表では、そういうふうな指摘はなかったように思ひます。ただ四人組が外国に内通したという指摘がある。その点からアメリカの学者との間に江青夫人がいろいろコミュニケーションをもっていたので、そういうことを指していたのではないかと我々は考えていたのですが。

カミンスキー ソ連との同盟關係を目指していたということに關しては、中国の公式見解であるという自信をもっております。この種の言及は、北京当局や譚震林氏の講演にはつきりと同じような形で出ておりました。だからそれでいいのではないかと思っております。

また江青夫人とアメリカとの關係ですが、それはおそらくウイトケ女史との關係を示しているのでしょうが、それに關しては、広東省の仏山市で江青夫人の目の前でウイトケ女史が彼女の自伝を書いている漫画が書いてあったのを見ました。

江頭 北京当局が、四人組がソ連との同盟關係に入ると

いうことについて、何か具体的な例証、事実をあげて説明してくれましたか。

四人組について、いま指摘されている罪状というのは、修正主義だとか、資本主義の道を歩む突権派とか、つまり、かつて鄧小平とか、その他幹部に向けられていた罪状と同じ罪状なんです。従って今度の場合、四人組がソ連に投降しようとしたということは、林彪に対しても向けられていた罪状なんで、こういう言い方で、華国鋒体制の性格を説明するというふうに考えられないでしょうか。

カミンスキー それは十分に考えられるのではないかと思っております。

中国の場合は、個人の罪状とは別に、そういうレッテルが貼られたもので、例えば、鄧小平にしても、かれ個人としてはソ連を非常に嫌っているというのは私自身知っていることです。私が聞き出すまでもなく、一九七三年及び一九七五年、二度もソ連に対して鄧小平は非常に厳しい口調で非難した。

また皆さんもご承知の通り、今回の四人組は林彪と関連づけられるまでに至っております。そういうふうな、実際に何かの決まったものに罪状というものを結び付けて、それを表に出すということは十分に考えられます。

これに対する彼の返事というのは、我々の工場にもこういう労働者大学というのがありますし、これはまさに新しい社会主義的成果であり、こういうものは今後もどんどん継承され、発展するであろうという返事でした。

また現在の中国における一つの表われとして、長征の追憶というのが再び強調されようとしており、幾つかの演劇にも、長征を題材にしたものが新たに登場しております。

また私たちが会見することができた各省の幹部にしても、彼らはほとんど長征に参加したものであり、そういうものからしても、文革そのものの影響力は、周恩来の解釈にまで後退するであろうが、完全に中国の社会生活から消えることはないであろうと思います。

坂本 そうなると、文革によって四人組が偉くなった、毛沢東によって引上げられたという事実はどう理屈づけるのでしょうか。

カミンスキー 例えば、王洪文についてもそうであるといわれるように、結局、張春橋を除いては、他の三人に関しては最初から、彼らがそれほど腹黒くはなかったというわけです。あとの過程で段々と悪くなったという説明が加えられ、しかも毛沢東としては、それがちゃんとわかっており、実際に彼が生前この四人組に対して発した幾つかの警告も引用されるわけです。しかも毛沢東の指示というか批判などが結局悪用され、わい曲されたといういい方で、

四人組と文革

坂本忠 四人組を徹底的に批判すればするほど、理論上、どうしても文化大革命を批判しなければならなくなるし、毛沢東そのものも批判しなければならなくなるのではないかと思います。いかがでしょうか。

カミンスキー 文革の問題ですが、そこで区別しなければならぬのは、周恩来のいつていたことと、鄧小平のいつていたことの区別です。

つまり、周恩来のほうは、文革中も非常にラジカルな方向で影響を及ぼしたが、基本的には鄧小平に比べたら周恩来の文革に対する態度、姿勢というのはずっと肯定的なものであった。つまり、文革の問題で周恩来を引用するならば、解釈としては、文革の中で幾つかの問題についての成果は、今後も継承して行ってもいいのではないか。そういうものになると思います。そこで、一つの例をあげたいと思います。

北京の第三繊維工場を訪れたとき、四十歳の工場長と話す機会がありました。その工場長に、鄧小平批判のキャンペーンで、上海の工作機械関係の工場労働者が人民日報に投稿した手紙についての意見をうかがったわけです。

人民日報に投じた手紙では、彼らの労働者大学が右派によって弾圧されているという苦情を寄せたわけですが、そ

毛沢東はすでに一つ高い段階のほうに引上げられるわけですよ。

そういうふうにして、毛沢東の矛盾というものが回避されるわけです。ただし張春橋に関しては、彼の昔のキャリアを詳しく調べるのを怠ったということがいわれていきます。つまり、張春橋に関しては、彼はもともと悪かった、そういうふうな感じですよ。

坂本 毛沢東が、彼が悪人だと知っていたことは、警察が、犯人とわかっていて、しばらく泳がしておいたということと同じようなものですか。(笑い)

カミンスキー そうともいえませんし、あてはまるともいえません。また毛沢東が、いわばグラント・オールドマンであって、超越しているわけです。そして時々しか手を降さない、介入しないという形で、その間は機が熟するのを徐々に待っている。しかも毛沢東の理論の中ではタイミングの問題、あるものがゆっくりと熟するまでのプロセスが非常に大切である。

例えば、四人組にしても、今回のように、機が熟して彼らが落ちるのが実現したわけですが、そういうことを通して人民は、結局彼らが悪かったというのを、人民自身のレベルでわかるというわけです。

こういう説明は、私個人の説明でなくて、中国側から得た説明であることは勿論です。(笑い)

文革の評価

宇佐美滋 中国は二度解放された。一度目は一九四九年で、二度目は今度の四人組からの解放である——と譚震林氏が語ったと説明されたが、文革の最中にこれらの人びとは特にひどい目に遭ったと思わなければならない。四人組が追放されてほっとした解放感というのは、特にひどい目に遭った人びとだからこういふ言い方ができるのか(笑い)他の人は違うのか、あるいはかなり本当にそういう感じをもったのか、そうだとすれば文化大革命というのは実質的にいまや否定されようとしているといっても言い過ぎではないかどうか。

カミンスキー 今回のこういう問題にしても、当然ながら世代間のギャップの問題も見逃せません。ご承知の通り四人組は特に若い人たちを味方につけようと画策をしていました。その例としてあげられるのは、十三歳の少女で、青少年組織の弁公室主任にしようとした例とか、入学試験の答案を白紙で出した張鉄生の試みですが、それは中国の歴史を、文化大革命を原点として、新たに書き上げようという傾向から出てきたと思います。そしてはつきりといえるのは、そういう傾向は、勿論いまでは完全に否定されまじし、むしろ弾圧されるのではないでしょう。しかも私たちは、今回中国を旅行して、ラジオでしばしば古くから

の幹部の功績を讃えるようなスローガンが次々と流れてきたのを耳にしたし、なかには、旧幹部をポジジョンから追い出してはならないというスローガンが聞こえてきました。

ただその半面、何人かの若い人たちも文革のおかげで現在のポジジョンについているというのも事実であり、先程あげた、四十歳で北京第三繊維工場の工場長になっている彼とか、あるいは桂林県の主任となっている女性は、二十六歳で二十万人の上に立っているわけです。

そういうことで、文革への疑問というのは決して埋めることはないでしょう。

ただし全般的にいえることは、文革というものは、当局としてはどんどん後退させる方向へ向かうべきでしょうし、毛沢東風にいえば、七〇%が重視されて三〇%はけしからんということになる。

ただ完全に文革を押し戻そうとしても、中堅の幹部となっている多くの若手を考えると、それは不可能ではないかと思えます。

国連の評価

宇佐美 中国が国連をどういふに評価し、これまでの国連における中国の代表部の活動をどう評価しているのか。今度交代させられた喬冠華はなぜ交代させられたの

か。特に喬冠華の失脚の原因について、特別な情報を得られたかどうか。

カミンスキー 第一と第二の回答ですが、はっきりといえるのは、中国の人民と国連について話すことは不可能です。何人かの専門家とは話すことができたが、それでも彼らはどれだけ代表的な意見をもっていたかについては私もわからない。

中国における国連の評価ですが、一九六三年から一九六九年末まで七年の間において、再び国連に対する評価は高まったのではないかと思います。それでも、いまだに国連というものの国際法上の主体としての資格は拒否されている。そして国連の仕事そのものについては、たとえば今回の国連の下で行われている国際海洋法会議に関して、国際法の最も重要な改革すべき分野に手をかけているという点で非常に評価しています。

第二の、中国代表部の活躍については、彼らから回答を得られませんでした。

ただ、中国では、おそらく国連というものに対し、理論的なアプローチがあまり試みられていないのではないかと感じるでした。

例えば中国で発刊された唯一の国連に関する本は、一九五六年の「国際連合」ですが、そのタイトルを今回会話した人びとに言っても、向こうは全く知りませんでした。

喬冠華の失脚については、私自身も特別な情報を手に入れたわけではございませんが、北京飯店でハン・スー・イン女史に会いましたが、彼女は原因を完全に喬冠華の新しい奥さんのせいにしております。だがウィーンの大使館のほうでは、喬冠華は自からも積極的に四人組の陰謀に加わっていたという意見でした。しかしいずれが本当なのかはわかりません。

法体系の整備について

江頭 毛沢東の継統革命の理論からいえば、しょっちゅう秩序が変わっていくわけです。従って、そういうものを規定するような法律体系というのは軽視されるのではない。その点から、法律研究といったものも、やはり軽視されていく傾向があるのではなからうかと思いますが、今後中国の法体系というのが整理され、昨年改正憲法ができたが、将来、また改正されて、もっと変わるかどうか。

カミンスキー 中国における法体系の整備という問題ですが、中国がそういう法体系を整備しつつあるとか、用意があるといっても、それが西欧的なモデルとか、ソ連のモデルを志向するような法体系を目指す用意が来ているわけではなく、むしろ中国には従来から伝統的な中国固有の紛争の調停手続きというのがある、公式な手続き抜きに調停するというふうな、中国固有の紛争解決方法がありま

す。遅くとも一九五七年の終わりがら、そのような中国固有の方法に戻ったのではないかとみられます。

例えば、各役職の段階では、党の中に紛争調停委員会というのがありますし、各工場の段階でも、そういう調停委員会があり、工場の各ホールに、サブコミティーみたいなものがあります。そこでまず第一回の調停が行われたのちに、初めて裁判に持ち込まれる。

また刑事事件に関しても、まずローカルの公安局がその問題を処理しようとする。そこで処理できないと判断が下されたときには、はじめて次の高いレベルに回される。このように、中国の伝統に則った法体系、法概念があるわけで、今後中国の法体系が大幅にコリフィケーション（成文化）される可能性はあまりないと思います。

ただし、法律関係の雑誌類が再興するであろうし、専門書の再販が今後出てくるでしょう。そして刑事訴訟の場合、証拠手続の規制がいまよりも厳しくなるのではないかと。そういう方向へ向かうのではないかと思います。しかも中国の場合での法体系の整備においても、例えば裁判官のこれまでの教育からしても、西欧的な意味での教育を受けているのは、全くないといってもいいのではないかと。彼らは一九三〇年代から、伝統的な中国の法手続ですつとやってきたわけで、私が中国で会った唯一の西欧的な法律体系の教育を受けたのは北京大学の刑法の教授ひとりです。

文化とか、そういうことを考えると、あまり期待をもたせないようになるのではないかと感じます。

華体制の安定性

中嶋嶺雄 華国鋒体制の安定性という問題を含めて、いまの華国鋒体制というのは矛盾の只中にあるような気がします。それは、四人組追放そのものが、実は華国鋒のクーデターであったことが明らかになった。そのことは、十二月十七日の人民日報に一番よく記されていると思います。結局あれは華国鋒側のクーデターで、四人組の陰謀というのは、おそらく大したものではなかったということを人民日報自身が告白せざるを得なかったような気がします。

いわば、クーデターを起こした華国鋒に対する民衆の支持というのは、確かにあったけれども、それを証明する、説得する原理に華国鋒はどうもまだ悩んでいるような気がします。

特にいまの中国は文化大革命をあまり語っていない。おっしゃるように、周恩來のトーンで文化大革命を語りつつあるかもしれないが、十二月十七日の人民日報以来、あまり語っていない。

しかしながら、一般民衆の中には、どうしても文化大革命の担い手は四人組であり、そして最も毛沢東に近づいたのは、四人組だという印象があるだけに、いまのように四

彼は中国の法律問題を西欧側に門戸開放するという貢献はしているが、彼とて、そういうことをいっても、過大評価するのは禁物である。

江頭 国家の制度に関するものが、あいまいで、官吏の任免などやはりルールを踏まなかったりしていますが、将来ともそういうことなんでしょうか。

カミンスキー その点に関しては、中国人はおそらく今後、はつきり明文化された方向へは向かわないのではないかと。今のままの感じが続くのではないかと。

例えば、裁判官にしても、中国におけるすべての役職は無期限というか、期限が全く記されていない。つまり反対に言えば、いつでも辞めさせることができる制度になっている。中国人としては、すべてきちきちと決めてやる、制約されることを好まないのではないかと。ですから、今後も同じように続くのではないかと。

ただし、例えば一九七四年に制定された新憲法は、まだ周恩來の影響が非常に強かった。その憲法でも、その中では、個人の国家構成員としての市民権というのが非常に制約されている。今後、例えば周恩來寄りの路線が再興するときでも、以前いわれていたような、人民による民主主義的な独裁、つまり、民主主義的なコントロールというものが再興するのではなく、むしろ単なるプロレタリアートの独裁というものが強調されるようになり、それは逆に、成

人組をのしることは、結局文化大革命を否定し、ひいては毛沢東の権威を否定することになるわけで、その点で、どうも華国鋒のいまのやり方というものは、悩みの多い矛盾したものであって、そのことが、中国が新しい体制の成立、つまり華国鋒体制というものは、組織的にも、制度的にもエンドーズメントを得ていない。どうもそんなことになるのではないかと気がします。

カミンスキー 私は華国鋒の行動をクーデターとはとらえません。なぜなら、事前の自己防衛という手段は正当なものであるし、今回にしても、それがいえるのではないかと。そういう予防的な自己防衛という意味で、クーデターとはみません。

江青夫人のずっと以前の野心の証拠としては、一年以上も前に江青夫人が光明日報で書いた、自分のために支持を呼びかけるような記事などで、そういう野心を裏づけられます。また鄧小平批判のキャンペーンにしても、本当は、華国鋒も対象としていたものであるという点を思い出していただきたい。なぜなら、鄧小平キャンペーンで、鄧小平が批判されたすべての原則というのは、華国鋒が大衆会議で発表した報告ですべてあげられた原則でもあったし、そういう点から考えると、鄧小平批判というものは、華国鋒批判にもつながっていたと考えられる。

さらに人民日報でも、例えば、その後上海などでの民兵

アジア時報

昭和45年8月3日第3種郵便物認可
昭和52年3月1日発行
毎月1回1日発行
通巻第83号

3

1977

(座談会) 華国鋒治下の中国 G・カミンスキー ほか

中国から見た世界と

私のみた中国

佐伯喜一

タイ国政治の実情

ウクリット・モンコナウィン

社団法人

アジア調査会

についての記事が出ましたし、ドイツなどでも、民兵関係の記事が発表されました。彼らは、例えば、上海ではマシンガンとか、それ以上のものと高度な軍事関係の武器を手に入れているのがはつきりしていましたので、華国鋒としては、そういうものを非常に脅威と感ぜざるを得なかったのではないかと思います。

中嶋先生は、四人組が文革の功労者としての記憶は残るであろうとおっしゃいましたが、その半面、四人組がいかに民衆の中では人気がなかったかという証拠はいくらでも証明できます。とくに今度は軍という要素が、秩序とか維持のために大きな役割を果たすような体制では、大衆における人気というか、正当性の問題が非常に大きくモノをいうのではないかと思います。

確かに先生がおっしゃったように、客観的にみれば、毛沢東の権威も、今回のいろんなことで影響を受けることでしょうが、しかし中国人は当事者であり、客観的にみることはできない。そして結局中国の人民にとっては、毛沢東は聖人であり、そういうふうな性格のものであり、幹部にとっては、毛沢東というのは一つの必要性である。そういうことで、毛沢東に関しては評価は変わらないのではないかと思います。

ただ華国鋒政権の安定性については、私は先生ほどの大きな問題はないが、私も小さな(疑問符)をつけます。

(笑い)

ただ今回私が中国を訪れて非常に驚いたのは、高級幹部が、いままでは非常に慎重に発言していたのが、今度は、はつきりと、自分たちは華国鋒側についていると言っていたことです。

ゲルト・カミンスキー博士 (Dr. Gert Kaminski) 略歴

一九四二年オーストリア首都ウィーン生まれ。ウィーン大学で法律および中国語を学び、一九六六年法学博士号取得後、同大学に勤め、六七年から国際法の講師、七一年オーストリア中国研究会秘書長、七三年中国研究院院長を兼ね、中国研究と中国・オーストリア文化交流に献身、対外関係で公的活動もしている。

七一年国防問題研究でオーストリア共和国賞、七二年、七四年に国際法と極東関係の出版物研究でそれぞれレオポルド・クンシャク賞とウィーン市賞を受賞。

著書は「中国と国際法」(ベルリン一九七三年)はじめ五冊のほか多数の論文がある。なお今回の訪中は四度目。